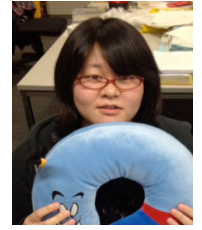


空間の開放性／閉鎖性に関する研究

－ 椎葉村K集落の住居から －

Keywords

開放的空間 閉鎖的空間 行為
並列型住居 増改築



K09069 刀根川 真衣

1. はじめに

1.1 研究背景

都市部において人々は高度に密集し、暮らしながらも、個々の関係は稀薄である。人と人、人と社会といった相互間を繋ぎ止めるのは経済活動を基盤としたシステムに他ならない。一方、都市部から遠く離れた中山間地域の集落ではある程度の密度で集まって暮らしながら人々は自立した生活を送っている。そこでは経済活動だけでなく、民俗的観念や行事を通して住民同士が互いに助け合いの精神を共有することによって、コミュニティの基盤がつけられている。都市と村落には人々が集まって暮らすという共通する項がありながらこうした差が生じている原因は何であろうか。このような問題意識に基づいて、本研究では、住居および集落の空間組織、住居の生産システムについて、生業を踏まえた生活の全体を統合的に把握することで、アプローチしたい。

1.2 研究目的

我々は、様々な性質・様態の社会的集団を形成しながら暮らしている。個々が集まって暮らす空間では個人やその家族といった集団に向けられた閉鎖的な空間と、それ以外の社会的集団に向けられた開放的な空間が形成される。中でも住居空間にはこの二つの空間が併存し、明確に分かれていたり混在していたりと様々なかたちを持つ。本研究の調査対象地域には開発の進んだ都市部の住居の間取りとは異なる特徴を持つ住居が古くから存在する。しかし現在では、増改築を行い暮らしている住民がほとんどである。こうした変化が住居内の閉鎖的／開放的空間にどのような影響を及ぼしているのか。本研究では人の行為に着目し住居内の空間を開放的／閉鎖的に分類することで変化を視覚化し、疑問を明らかにしていく。なお空間の分類を進めていく際、行為の主体と対象を以下の図1のようにパターン化し行為の振り分けを行う。

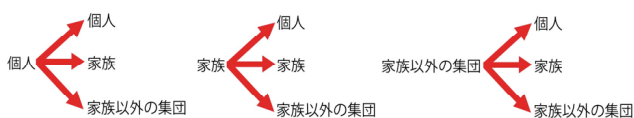


図1 行為の主体と対象の分類パターン

1.3 研究方法

1.3.1 調査期間、調査地、調査方法

調査期間：平成24年9月13日～平成24年9月23日

調査地：宮崎県東臼杵郡椎葉村K集落

調査方法：10日間のフィールドワークを行い、インタビュー、住居の実測を行った。

1.3.2 調査内容

実測調査ではK集落内の19軒の住居、1軒の集会所の平面図、断面図、物品の配置・寸法を測り、また集落図や集落断面図も作成した。インタビュー調査では11軒の住宅を対象に、家族構成や一日の生活パターン、生業、住居の増改築等の変遷、間取りと居室の名称、宗教、移動手段、地域で行われる民俗行事等について聞き取りを行った。

2. 調査地概要

2.1 宮崎県東臼杵郡椎葉村

宮崎県東臼杵郡椎葉村は宮崎県の中でも北西部、耳川水系上流部の九州山地に含まれている。山腹は急斜面で、河川が山地を分断・浸蝕し険しいV字溪谷を至る所に形成している。気候は内陸型で冷涼多雨多湿である。村の面積の約96%が森林や田畑となっており、人口に占める農林業就業者数の割合が高い。かつては焼畑農業が盛んに行われていた。また人間が生命力の強化と復活をはかるために、清めと鎮魂をする祭祀「椎葉神楽」は国指定重要無形民俗文化財として認定されている。

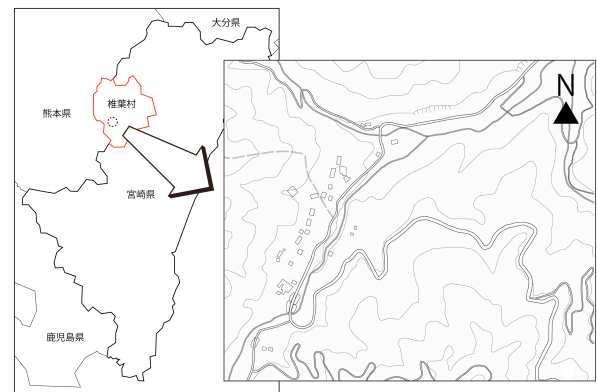


図2 調査地図

2.2 K集落の概要

K集落は、国道265号線沿いの耳川上流に位置し、戸数は全体で20戸ほどである。国道と河川に沿って、山の斜面にわずかに切り拓いた細長い段状の土地に山を背に、山に沿うようにして住居が建てられている。図4からもわかるように、河川を挟んで集落内に高低差が見られる。ほとんどの住民が田畑を所有しており、主屋とは別に農機具等を収容する付属屋が敷地内に建てられていた。



図3 集落図

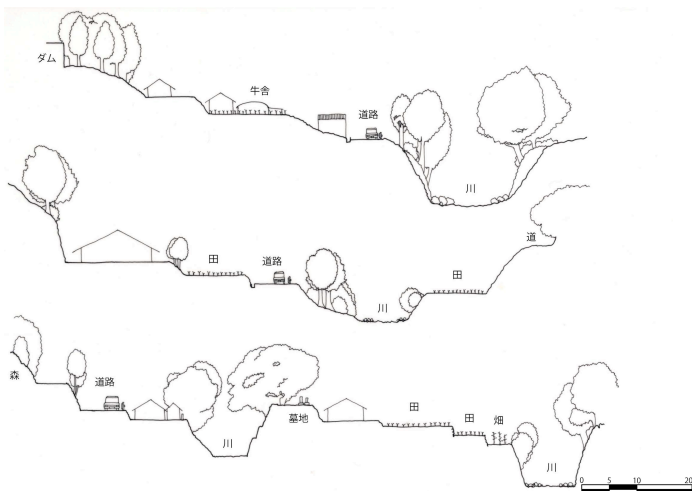


図4 集落断面図

3. 並列型住居

3.1 宮崎県の民家

3.1.1 間取り

敷地が広くとれない中山間地域では住居の構造も横長となっている。梁行方向にのみ間仕切りを設けて部屋割りをしているのが特徴で「並列型住居」と呼ばれる（図5）。ドマは住居の右、あるいは左側にあり一定ではない。奥は2、3段の戸棚になっていて全て閉ざされている。ドマからウチネ、デイ（デエとも呼ばれる。以下デイ）、コザと部屋が続く。居室の手前から一間のところに横にナゲシやメクラナゲシと呼ばれる敷居が渡されており、その敷居を越えて座れるか否かで身分の上下を区別した。

3.1.2 各居室の特徴

ウチネ：家族が囲炉裏（ジロ）を囲みながら、食事、団らんをする空間。

デイ：家の中では最も広く通常は客間として使用される。その他にも冠婚葬祭等、多人数が集まる際に使用される。

コザ：神棚、仏壇をまつり、住居内では最も神聖な空間として最奥にある。かつては女性が入室を禁じられていたと記された文献もある。

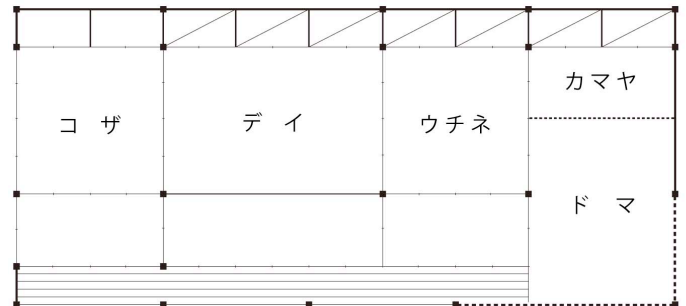


図5 並列型住居間取り

3.2 K集落の民家

従来の一般的な並列型住居の様式は残しながらも、現代の暮らしを少しずつ織り交ぜ、付け加えている。例えば、かつては浴室や便所を主屋から離して設け、湿気を主屋に持ち込まないようにして暮らしていた。しかし現在のK集落ではほとんどの住居で浴室や便所を主屋に取り込み、室内動線の確保が優先されている。また中廊下を設けることによって個室が発生している住居も見られた。

4. 閉鎖的空間と開放的空間

4.1 従来の並列型住居

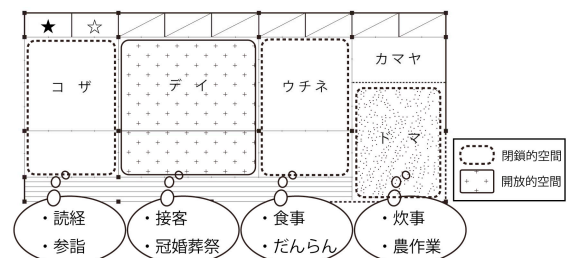


図6 従来の並列型住居 開放的／閉鎖的空間

4.2 現在のK集落の住居

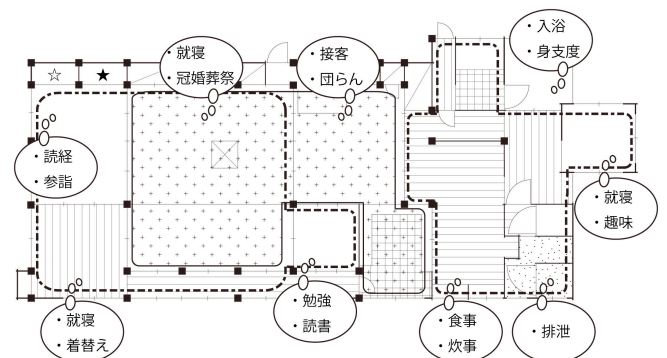


図7 現在のK集落の住居 開放的／閉鎖的空間

4.3 比較検討

4.3.1 ウチネ

はじめにウチネと呼ばれる居室について比較する。従来の並列型住居では、ウチネは家族が食事や団らんをす

る空間であった。食事や団らんといった行為が行われる空間は家族内では開放的空間に分類できるが、家族以外の集団、つまり近所に住む住民などの来客を応接するダイと比べるとウチネは比較的プライベートな閉鎖的空間ととらえることもできる。またウチネでは家族が就寝することも多かったことから閉鎖的空間としての要素が強いと言える。

一方現在のK集落の住居ではウチネに対応する居室で家族が食事をとるという事例は11軒中2軒と少ない。また、来客時にウチネに客を通し応接をするという事例が6軒だった。これらを考えると、従来の並列型住居でのウチネよりも開放的空間としての要素が強くなっている。

半数の住居で来客時の応接間としての機能がダイからウチネに移行したことについて考えられる理由として、玄関の位置が挙げられる。増改築や比較的最近新築された住居に新たに玄関が設けられる際に、以前にドマとして使用していた空間やその近くに作られる場合が多い。かつては訪れた近隣の住民には通り縁で対応していた。農作業を行うことが多い住民同士では土足のままやりとりできる空間が恰好のコミュニケーションの場となっていた。しかし風雨や冷気をしのぐために縁側にはアルミサッシの窓がはめられ、少しの談笑にも以前のような気軽さは無くなった。そうした環境の中で、玄関に最も近いウチネという空間で来客時の応接を行う住居が増えていったのではないかと。もちろん現在でも近隣住民とのコミュニケーションに縁側を使うこともある。

4.3.2 ダイ

続いてダイと呼ばれる居室について比較していく。従来の並列型住居においてダイは客間として使用され、接客という行為が行われるので開放的な空間に分類できる。また神楽の舞台、舞所として使用される際も祭祀という行為が行われ村中の人々に開放される空間となる。家族もダイでは就寝しなかったことから開放的空間だといえる。

現在のK集落の住居でかつてのダイにあたる居室では多人数の来客がある際に客間として使用されることはあるものの、神楽も民家で実施することが少なくなった関係で普段はあまり使われない。ただし若い家族や高齢の夫婦（妻）が就寝するのに使用されるという事例があった。これらのことから現在のK集落の住居におけるダイは普段は就寝という行為が行われる閉鎖的空間だが、冠婚葬祭や何末年始など多人数が集まるハレの時は開放的空間となる二つの面を併せ持つ。多人数が集まる際に使用されるという点では従来のダイと共通しているので、現在の住居のダイが閉鎖的空間に分類される点に注目する。ウチネが現在のK集落の住居では開放的空間に分類できるということを受けて、ハレの時以外は接客などが行われなくなったダイが徐々に閉鎖的空間として認識さ

れるようになっていったのではないだろうか。普段、接客をダイで行うというところもあったが、民宿を営んでいて通常の住宅とは少し異なる空間の使い方をしている。

4.3.3 コザ

コザについてみてみると、従来の並列型住居と現在のK集落の住居にあまり差は見られない。住居の入口から最も離れた座敷の奥側に神棚や仏壇が祀ってある。文献には女性の立ち入りが許されなかったとあるが、現在はそのような決まりはなく、女性は毎日水を替えたりお供えをしたりする。コザ自体は特に使用目的のある居室ではない。しかし、住居内の最も神聖な場所として認識されているため、客を招き入れたりはいしない。家族がお参りをしたりお供えをしたり線香をあげたりすることも考慮に入ると、コザは閉鎖的空間の要素が非常に強い。コザの手前一間（または一間半）が襖や壁などで仕切られ、小さな居室が設けられていることが多く、子供室や夫婦の寝室として使われている。この居室では寝る、勉強する、着替えるといった行為が行われ、比較的閉鎖的な空間であるといえるが、コザに比べて閉鎖性は弱い。

表1 開放的／閉鎖的空間の分類

	従来の 並列型住居	現在の K集落の住居
ウチネ	閉鎖的	開放的
ダイ	開放的	閉鎖的
コザ	閉鎖的	閉鎖的
増改築部分		閉鎖的

5. 考察

現在のK集落の住居は従来の並列型住居に増改築を施し、浴室や便所、壁や建具で仕切られた個室、台所といった空間を新たに設けているものがほとんどである。ここでは入浴や排泄、寝起き、着替え、といった行為が行われ、家族に向けては閉鎖的空間に分類できる。台所では食事するという行為が行われ、開放的空間とも判断できるが、家族以外の社会集団から見た場合など見方によって閉鎖的な空間とも分類できる。増改築によって新たに増やされた箇所にはプライベートな空間を確保するために設けられた居室が多くあてがわれていることがわかる。

また住居の軒方向に居住空間を広げていく傾向が顕著に見られた。これは斜面をわずかに切り拓いた敷地に沿って住居を横長に伸ばさざるをえないのと、日光の確保に好都合であることが理由として考えられる（図8）。

ウチネでは必ず設けられている囲炉裏を木蓋で塞ぎ、ストーブなどの暖房器具を置いている住居がほとんどだった。かつてのウチネの食事やだんらんといった機能が役目を終え、接客用の座敷として使われることが多くなっていったことが原因だと考えられる。家族の食事には専用の台所があり、就寝は各々の個室で行えばよい。こ

うして家族は接客をウチネで行い、安全で便利な暖房器具を用いて不要となった囲炉裏を塞ぐに至った。

こうしてみると、寝食分離や中廊下の出現による個室の発生など近代日本における住宅の変化がみられるようになったことがわかる。かといって都市部に乱立しているような住宅メーカーの二階建ての商品住宅が建てられる訳ではない。地元の大工や建築家に依頼し、自分達の山で育った材木を使って住居を建てる。地域の様式は残しつつ自分達に合った暮らし方ができる生活スタイルを選択し確立している。プライベートな空間を新設し住居の外部とある一定の距離を保ちながらも完全に遮断はせず、集落内の住民とある意味では家族のような関係を保っている。住民の持つ土着的なアイデンティティが都市と村落の人々の結びつきの違いを生んでいるのかもしれない。

K集落では住民のほとんどが田畑や山に土地を持っている。普段は村の中心へ働きに出ている住民も休日など時間がある時に山へ入って林の手入れをしたり、農作業を行う。住居に土足のまま外から入って使用できる便所や台所が設けられている住居が多くみられ、ドマの文化が色濃く残っていることがわかる。ドマは以前は炊事や農作業が行われる閉鎖的な空間として位置づけられていたが、現在では近隣の住民とのコミュニケーションの場として集落という外部と住居という内部を緩やかに繋ぐ緩衝剤のような役割を果たしている。

K集落内の住居は山側を背に建てられている住居がほとんどである。神棚も仏壇もコザの山側にまつられていることが多い。神楽を行う際にデイに設けられる祭壇も山側に配置される。インタビューの中では住居内にカミ・シモの観念は無いと答えた住民も多かったが、どちらかという山側を神聖視している傾向にある。集落内で昔から屋根の葺き替えや農作業などを村民全員で互いに協力し行うことを「かてーり」と呼ぶ。このかてーりは集落内を流れる川の上流と下流の二つの地域に分かれており「カミ」「シモ」と呼ばれているが、川の流れによる集落内での上下の区別は呼称だけにとどまっている。

現在のK集落の住居のように、従来の並列型住居に閉鎖的な空間を付け足したり、新たに付け加えた空間を閉鎖的な空間として扱ったりすることで、従来の並列型住居の開放的／閉鎖的な空間からの変化がみられた。かつては開放的な空間だったデイが現在ではあまり客間として使われず、家族が寝起きする居室として使われ、閉鎖的な要素が強くなっていったのも1つの例である。全体的に現在のK集落の住居は従来の並列型住居に比べて閉鎖的な空間の範囲が広く、代表的な三室（デイ、ウチネ、コザ）の開放性／閉鎖性も付け加えられた他の居室に機能が移行した分、弱まっていると考えられる。

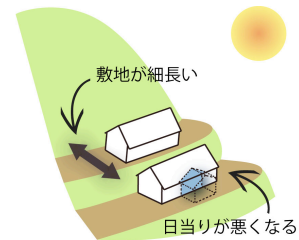


図8 敷地と日当り

6. おわりに

現在椎葉村では就職難で若者の流出が起り、高齢化に拍車がかかっている。かつては盛んだった林業も輸入材の登場により材が売れず、商売にならないという。古くから守り伝えられてきた様々な民俗行事も、少子化で後継者がなく存続の危機を迎えている。こうした問題をふまえ、外部から観光客を呼び焼畑や神楽を行ったり、集落の住民で営農組合を結成し放棄された農地の整備や住民同士の寄合を開いて地域の活性化を目指すなどさまざまな活動が行われている。K集落のような共同体は一般的には限界集落とされ、社会が弱体化するとの見方がある。ところがそうした懸念を余所に危機感や意欲の共有が村民同士を強く結びつけ、ますます強固なネットワークを形成しているのである。

しかしそれは、どんな問題にも抵抗できる万能の勢力ではない。交通網などの開発が進み、暮らしが便利になることで崩壊してしまうかもしれない。居室の開放性／閉鎖性を読み取ることで、時代の流れとともに住居の形態も変化し、住居空間が持つ性質も移ろいを見せたことがわかった。確かに個室などのプライベート空間を確保する動きや、柔軟性のない固定的な居室の増築が見られたりとK集落にも都市的な住居計画が取り入れられつつある。しかしすべてが都市的で便利で無駄のない生活は隣人との交流の場を奪ってしまう。多少不便な暮らしでも互いに助け合える機会を残すことが強固なネットワークの形成に重要なのである。

K集落の住居が閉鎖的な要素を強めながらもドマや代表的な3空間を残しているのは、古くから変わらない自分達の暮らしに最適な形態を受け継いでいるのと、それらを取り去ることでコミュニティの場を失ってしまうことへの恐れがあるからなのではないだろうか。

参考文献

- 1) 椎葉村史
- 2) 大久保地区調査報告所／椎葉村教育委員会
- 3) 日本住宅の空間＜オモテとウラ＞＜ウチとソト＞のスペースオロギー／宇杉和夫
- 4) 住まいを読む―現代日本住居論―／鈴木成文
- 5) 中廊下の住宅―明治大正昭和の暮らしを間取りに読む―／青木正夫、岡 俊江、鈴木義弘